

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：会津・漆の芸術祭

事業者名：福島県立博物館

住所：福島県会津若松市城東町1-25

TEL：0242-28-6000

FAX：0242-28-5986

HPアドレス：<http://www.general-museum.fks.ed.jp/index.html>

連携事業者名：福島県・会津大学・福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター・会津若松市・喜多方市・会津漆器協同組合・喜多方漆器協同組合・会津若松商工会議所・喜多方商工会議所

会場：福島県立博物館、会津若松市街、喜多方市市街

事業期間：平成22年5月19日～平成23年3月15日



1. 館の使命と本事業の関係

福島県立博物館では新しい時代の博物館として目指すべき目標をとりまとめた「福島県立博物館の使命」を作成・公表し、「ふくしま発見 博物館」「出会いふれあい 博物館」「あなたも主役 博物館」の三つの目標を掲げている。当事業を通して、地域の文化資源である「漆」への理解が深まり関心が高まり、参加者は「漆」という要素を通して、ふくしまさらには日本の歴史と文化、自然について学習することができた。←「ふくしま発見 博物館」の達成。また当事業により、会津の職人や漆芸作家と美術家、研究者、一般参加者の協働の場を生み出すことができた。さらに博物館はこれまでの活動の蓄積を活かして、その協働の場や資料・素材を提供することができた。←「出会いふれあい 博物館」「あなたも主役 博物館」の達成。

2. 企画内容

①事業目的

「漆」は会津が守り育んできた文化資源である。その魅力を地域の人々やその他地域からの会津への来訪者と共有し、継承と発展の可能性を模索するため、「漆」の様々な要素を提示・提案する芸術祭を開催した。福島県立博物館の漆に関する様々な研究成果、21年度当該支援事業として会津大学その他の団体との連携により行った「漆のくに・会津」プロジェクト事業の成果を活用し、22年度新たに連携する諸団体の協力を得て、漆文化の歴史、伝統、現代に伝わる技術や生活文化、漆の素材としての可能性、漆芸表現などを漆芸に関わる関係者を含め広く一般の人々に紹介。漆について、漆文化について、また漆という文化資源を有する会津地域の魅力について、地域の人々を中心に事業の連携者や参加者、来場者とともに考える契機とし、漆と地域の再発見の場を創出した。事業においては様々な形態で、会津の漆芸作家や職人、小中学生、高校生、地域住民の参加を呼び掛け、本事業を通して福島県立博物館が異なる業種、異世代間の交流の拠点となることも目指した。

②事業概要

蔵造りや近代建築の店舗など、歴史と文化を色濃く残す建物や通りが残る会津地方。会津若松市・喜多方市および周辺の店舗や空き屋、空き蔵、ギャラリーなどの既存施設を主な会場に「漆」を共通テーマをした作品を展示した。展示箇所は61箇所。会津若松、喜多方の市街地では会津地域の歴史と文化を体感できる施設・建物に、県内外の漆芸作家の作品、漆を素材とした芸術作品、優れた漆器などを展示。会期前・会期中にはワークショップや公開制作を行い、そこで制作された漆作品も展示することで、芸術祭への一般の参加を促した。会期中、漆に関する学習効果を狙った職人の工房見学や漆の植栽体験を含む観覧ツアーを実施、漆をテーマにトークイベントやパフォーマンスなど関連イベントも行った。会津地方をめぐり、その歴史・文化・自然に触れ、会津の人々と交流しながら、漆の魅力や可能性、会津地域の豊かさや文化の奥深さを実感できる事業を実施した。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

i まちなかギャラリー（展示期間:10月2日～11月23日）

会津若松市、喜多方市の市街地にある歴史と文化を感じさせる建物や店舗を主会場に、漆作品の展示が点在。来観者は、会津地域のまちなかを散策しながら漆アートをめぐった。出品作家には会津の漆の歴史と文化を理解してもらうためのエクスカージョンを実施。作品制作の一部には会津大学短期大学部の学芸がボランティア参加した。その他、運営ボランティアを広く公募し地域住民が事業に主体的に参加できる仕組みを設けた。

ii 漆+アーティスト・コラボ（実施期間:6月19日～10月1日）

漆や漆を使った装飾技法に熟練している会津の作家や職人と、漆芸以外の分野で活躍するアーティストが新たな漆作品を創作するコラボレーション。会津漆器伝統の模様や技法を新たな視点で再生活用することを目指した。制作した作品は、芸術祭で展示・公開した。

iii ワークショップ（実施期間:7/16～11/15）

漆の素材としての多様さ、技法の多彩さ、漆の質感を体験、会津の漆文化を理解するための様々なワークショップを開催した。参加者が楽しみながら漆や会津地域の文化に親しめるプログラムを実施。作品の一部は展示・公開。講師は会津の漆芸作家と漆関係のNPO団体、出品作家が担った。

- ワークショップ1「うるしころ」(10/16, 17 11/3, 7, 15)：福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター開発の新素材・漆粘土を活用。講師は会津大学短期大学部准教授井波純氏、同大学講師吾子可苗氏が担当、会津大学短期大学部学生がボランティアでサポートした。
- ワークショップ2「私の漆を育てようー漆苗植栽ー」(11/6)：平成21年度当該事業で連携したNPO団体が講師を務め、事業内容を継続させる。iv会津・漆の旅と連動させた。
- ワークショップ3「漆の木を知ろう」(7/16)：参加参加の辻けい氏と、辻氏とii漆+アーティスト・コラボを行った漆職人の谷口吏氏が講師となり、漆の木の特質のレクチャー、辻氏の作品へと生まれ変わる漆の木への祈りの儀式、掘り出し作業の見学を行った。
- ワークショップ4「うるしのこぼしさん むりもりお手伝い会」(8/28, 29 11/13, 14)：参加作家はと氏が会期前と会期共に2回ずつ実施。会津若松市内の店舗を会場とし、会津の伝統的民芸品起き上がり小法師に漆でオリジナルの絵付けを行った。一般の人が漆を体験する機会となった。ボランティアスタッフがサポート。
- ワークショップ5「新聞紙を丸めて貼って子豚をつくろう」(9/13, 15)：参加作家山本伸樹氏が会津若松市内の幼稚園で2回に渡って実施。カシュエ塗料を用いた。ボランティアスタッフがサポート。
- ワークショップ6「うぶすなアートラボ〜カミタマン！お子様は神様なんだな〜」(7/12, 13)：参加作家出町光識氏が会津若松市内の幼稚園2箇所で開催した。

iv 会津・漆の旅(実施日:10/2,17 11/6,21)

職人の工房見学とまちなかどギャラリーの観覧案内。福島県立博物館館長と学芸員がガイドした。

- ツアー1・2・3・4…工房見学と作品鑑賞（1は作品鑑賞のみ）。

v トークイベント&コンサート&シンポジウム(実施日:10/2～11/23)

日本文化の大きな部分を担ってきた漆文化の豊かさ、これからの将来像、漆器産地のありかた、漆素材そのものの可能性など、漆にまつわるさまざまなテーマについて、来場者と一緒に漆について考えるトークイベント、塗料としての漆素材の歴史や日本の音楽文化がわかる漆を使った楽器のコンサート、漆のアクセサリを紹介するファッションショー、を開催。素材としての漆の魅力を様々な角度から紹介する。イベントの運営ボランティアを広く公募し地域住民が事業に主体的に参加できる仕組みを設ける。

- トークイベント「山下裕二さんと語る 会津・漆の芸術祭」(10/10)：公募作品選考委員の山下裕二氏（明治学院大学教授）をゲストに招き、赤坂憲雄ディレクターと「会津・漆の芸術祭」の意義と可能性についての対談を行った。

- トークイベント「漆で表現する」(10/23)：若手作家による漆素材の魅力、漆で何を表現しようとしているかについての座談会。コーディネーターは、会津大学短期大学部准教授・井波純氏
- コンサート「漆の楽器コンサート」(10/16)：尺八と箏の演奏家による漆の楽器コンサート。和楽器における漆の活用についてのレクチャーも行った
- コンサート「蔵元歳時記・えびす講+漆の楽器コンサート」(11/15)：まちなかギャラリーの展示会場でもあった喜多方市内の蔵元の年中行事の体験と会津能楽会会員による漆の楽器コンサート。和楽器における漆の活用についてのレクチャーも行った。
- シンポジウム「福島・会津・いわきアートトライアングルを語る」(11/20)：福島県内の福島市、会津若松市、いわき市でそれぞれアートイベントが開催された2010年。それぞれのディレクターがパネリストとなり地域振興とアートについて討議した。
- シンポジウム「会津・漆・アート」(11/23)：公募作品選考委員の樋田豊次郎氏（秋田公立美術工芸短期大学学長）と山下裕二氏（明治学院大学教授）をパネリストに招き、会津・漆の芸術祭ディレクター兼福島県立博物館長赤坂憲雄がコーディネータを務めた。テーマは「会津・漆・アート」。会津・漆の芸術祭を振り返り、その意義とこれからの可能性を討議した。

vi 漆のくに・会津VR（実施期間:5/19～2011/3/15）

平成21年度当該事業によって作成した＜漆のくに・会津＞プロジェクトのサイトの運営と新たなコンテンツ制作。会津・漆の芸術祭の準備・開催・撤収の様相を紹介しながら、同時に会津の漆文化、歴史を取材。コンテンツに反映させる。平成21年度に引き続き、会津大学短期大学部と福島県立博物館が制作。関連団体の協力・助力を得て内容を充実させた。

（2）参加者の数

参加者人数 延べ 89,700人
 内 訳： 展示観覧者数 88,183人
 イベント参加者数 1,519人

（3）事業により作成した印刷物等

会津・漆の芸術祭ポスター 5,000枚 ／会津・漆の芸術祭チラシ 50,000枚
 会津・漆の芸術祭マップ 2,000枚／シンポジウムチラシ 5,000枚
 事業報告書 500部

○新聞記事 11社63件

[illegible]

○テレビ 3社5件, 関連誌等 14社19件

[illegible]

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

（1）博物館活動のアウトプット

本事業の実施目的の一つはこれまでの福島県立博物館の活動成果を広く還元することであった。研究データ、収蔵資料等を学芸員が作家にレクチャーし、それを反映した作品を制作して展示することで、活動成果の新しい活用方法となることを模索したものである。博物館や関連地、工房などへ下見を重ねる作家は多く、それらが作品制作展示に反映された。会期中 88,000 人という多数の来場者が作品を通して漆に関する知識や歴史を体感し得たことから、芸術祭が博物館活動の新しいアウトプットの方法として一定の効果があったと捉えている。一方でより深く効果的に博物館活動を反映していくことが可能と考えられ、今後の大きな課題となった。会期前、会期中に行った各種イベントも一般の興味感心を喚起するという目的をある程度達成できた。アンケートなどからは参加することで会津の歴史、文化、土地の魅力への新たな発見があったことなどが窺えた。

（2）博物館の交流拠点化

本事業を通して、展示会場となった会津若松市内・喜多方市内などの店舗等と作家との交流、県内外の作家と会津の職人の交流、ボランティアスタッフと作家、地域との交流が生まれた。多種多様な人々が関わることで生まれた交流が、それぞれの参加者にとっても何よりの成果であったようである。博物館がそれら交流の場を創出することは、地域における博物館の文化的役割を考えた際に非常に重要なことであり、今後もさまざまな方法で取り組んでいくべきであろうと考えている。

- ・この機会でなければ出会えない人々と出会えた。（ボランティアスタッフへのアンケートより）
- ・アーティストの方の手伝いをしたり、生の作品を扱う仕事をした時、実際にこうした作業に携わる機会はほとんどないので貴重な体験でした。（ボランティアスタッフへのアンケートより）
- ・普段来店しない若い学生の様な方など来てくれた。（展示会場主へのアンケートより）
- ・人の輪が広がった！（展示会場主へのアンケートより）
- ・遠方から来られた漆工芸専攻の学生達と交流できたこと。（展示会場主へのアンケートより）

（3）地域の各団体との連携基盤の構築

本事業を通して、会津大学、市町村、漆に関わる各団体との連携を図ることができた。連携の密度は各団体によって異なりはするが、それぞれのこれまでの活動や専門性を活かした連携を行うことで、事業効果が各段に上がることが実感としてある。特に、博物館のような文化施設がそれらの連携のパイプ役を担うことは、個々の団体の参加を促しやすく、今後の連携の可能性を引き出した。本事業を通して構築できた博物館と各団体の連携基盤を、今後より効果的に活用していくことを次の課題としたい。